長谷川孝士　著

歌集　櫟の落葉

本歌集は、兵庫教育大学に勤めておられる著者が、昭和五十五年十二月から昭和六十年九月までの間、おりおりに詠まれた短歌のなかから四百九十九首を抜いてまとめられたものである。

構成は、著者の処女作である、

散りしける櫟の落葉しらしらと霜ふる今朝は動くともなし

朝な朝な鳴く山鳩の声聞かず霜白き落葉踏みつつあゆむ

黒き雲北片寄りにたむろしてひねもす寒さゆるまざりけり

の三首を含む「櫟の落葉」から始まり、年次順に「虎落笛」「薄明の野」「つゆくさ」「はだか木」の各集が収められている。

著者は「あとがき」の中で、「生活メモのようなつもりでことばを連ねた」と述べているが、季節の移り変りが自然の細かな描写の中に巧みに表現されており、著者の言葉の豊かさや感受性の鋭さに深い感銘を覚える。詠まれた場所は南は沖縄から北は北海道まで様々であり、ひばり、ひよどり、蛙、蜻蛉や、浜木綿、ななかまど、あじさい、ひがん花など自然のものも多く描かれていて、読者を飽きさせることがない。自然や周りの人々に対する著者の暖かい気持

ちに心安まる思いがする一方、時折研究者としての決意や反省がうかがわれてはっとさせられることも多い書である。

（B6判、二一七ページ、昭和六十一年十二月二十五日、青葉図書刊、一、五〇〇円）

（高野　英朗）